

八王子市の小中学校の教師に対する小児高次脳機能障害の認知度調査

Survey on awareness of pediatric higher brain dysfunction among elementary and junior high school teachers in Hachioji City

緑川ゼミ

堂脇優美¹⁾, 田村和俊¹⁾, 平山希¹⁾, 大宮旨世¹⁾, 筆保美咲¹⁾, 松原仁大¹⁾, 元木樹¹⁾, 加田李奈¹⁾, 藤寄真佳¹⁾, 諏訪凧¹⁾

指導教員 緑川晶

中央大学 文学部 心理学専攻 緑川ゼミ

キーワード：高次脳機能障害, 小児, 教師, 障害理解

1. 研究目的

2001年から厚生労働省により開始された高次脳機能障害支援モデル事業では、調査対象者424例のうち20歳以上の成人期脳損傷者が71.5%を占めており、小児高次脳機能障害についての詳細な検討が十分になされていない。池田・高橋(2008)によれば、高次脳機能障害児は、学校生活において「周りからの理解の乏しさ」と「障害特性からくるコミュニケーションの難しさ」により孤立する傾向にあり、教師は障害特性を理解し、特別支援教育との関係の中で対応を図っていく必要があることが示唆されている。しかし、学校の教師が高次脳機能障害の障害特性や支援方法をどれほど認知しているかについては明らかになっていない。障害特性が類似している発達障害に関しては学校の教師を対象にした認知度調査が多くなされているが(杉崎,2000、原・小方,2007)、高次脳機能障害に関しては一度もなされていない。そこで、本研究では小中学校の教師を対象に、発達障害と高次脳機能障害についての認知度調査を行い、発達障害と比べて高次脳機能障害がどれほど認知されているかについて検討する。そして高次脳機能障害の認知度が低かった場合は、ポスター配布によって実際に普及活動を行っていく。本研究は教師の高次脳機能障害の認知度を明らかにすることによって、普及活動の足掛かりになり、普及活動が高次脳機能障害児の早期発見や生きづらさの軽減につなげることを目的とする。

2. 高次脳機能障害とは

「高次脳機能障害」は、一般に、外傷性脳損傷、脳血管障害等により脳に損傷を受け、その後遺症等として生じた記憶障害、注意障害、社会的行動障害などの認知障害等を指すものであり、具体的には、「会話がうまくかみ合わない」、「段取りをつけて物事を行うことができない」等の症状があげられる。これらは、日常生活において大きな支障をもたらす場合があるが、一見してその症状を認識することが困難であることなどから、周囲に理解されにくい症状である。

高次脳機能障害のなかでも、特に小児の場合に見られる障害の原因として、外傷性脳損傷が最も多く、次いで脳血管障害、脳炎・脳症、低酸素脳症など、原因は多彩である(廣瀬, 2022)。脳炎・脳症においては他の疾患よりも低年齢で見られる場合が多い。患者数は、栗原による調査(栗原, 2010)の結果を全国レベルで推計すると、後天性脳損傷による高次脳機能障害の子どもは少なくとも約5万人いるのではないかと推測されるが、正確な実態は明らかではない。

3. 方法

調査対象者：八王子市内の小中学校教員 2561名を予定。

実施手続き：本研究の目的と手続きを手紙で説明したうえで同意を得られた学校と教員を対象に以下の発達障害と、高次脳機能障害の認知度調査アンケートを行う。アンケートの配布と回収は10月下旬～11月上旬を予定。なお、アンケートはどちら

も同内容の紙媒体、電子媒体（Google Form）の二媒体を利用する。

- ①. 回答者の属性：1) 学校の分類（小学校／中学校）、2) 性別（男性／女性／回答しない）、3) 年代（20代／30代／40代／50代／60代以上／回答しない）4) 教員経験年数（5年間未満／5年間以上／10年間以上／20年間以上／30年間以上／40年間以上）、5) 勤務経験（幼稚園／小学校／中学校／高等学校／大学／特別支援学校）、6) 担任の有無（している／していない）、7) 発達障害児の支援経験（通常学級／特別学級／特別支援学校／通級指導教室／特定の学級等の枠組み以外で支援したことがある／支援した経験はない）
- ②. 発達障害についての質問項目：1) 発達障害の熟知度（よく知っている／知っている／少し知っている／あまり知らない／ほとんど知らない／全く知らない）2) 発達障害の特徴についての熟知度（「言葉の遅れ、オウム返し、会話が成立しないなど、言葉やコミュニケーションの障害がある」など複数提示し、知っている項目数を回答させる）3) 発達障害児に対する「手立て」の理解とその実践状況（実際に実践している／特に配慮が必要な児童が周りにいない／「手立て」を知っているが、実践はしていない／どのような「手立て」が必要か分からない）4) 発達障害者の支援施設についての理解状況（知っている／知らない）5) 発達障害の成因（先天的／後天的／どちらもあり得る）。
- ③. 高次脳機能障害についての質問項目：1) 高次脳機能障害の熟知度（よく知っている／知っている／少し知っている／あまり知らない／ほとんど知らない／全く知らない）、2) 高次脳機能障害の特徴についての熟知度（「物忘れがひどく、新しい出来事を覚えられない」「自分で計画を立てて物事を実行することができない」など複数提示し、知っている項目数を回答させる）、3) 高次脳機能障害を支援する施設の理解状況（知っている／知らない）、4) 配慮が必要な高次脳機能障害児に対する「手立て」の理解とその実践状況（実際に実践している／特に配慮が必要な児童が周りにいない／「手立て」を知っているが、実践はしていない／どのような「手立て」が必要か分からない）、5) 高次脳機能障害の成因（先天的／後天的／どちらもありうる）、6) 高次脳機能障害の原因の理解度（「自転車乗車中の事故による脳外傷」など複数提示し、知っている項目数を回答させ

る）

④. 自由記述

※使用するアンケートの電子媒体は以下のフォームの通り。

（ <https://docs.google.com/forms/d/1whBeSwEP-XtemnSjwSgXokH49Nyl8otJDCMUpmNfM3I/edit> ）

4. 今後の展望

子どもは発達期に障害を負うことで、発達課題を乗り越えることがより一層難しくなることが予想される。そうすると不適應に陥り、自己肯定感の育成がより困難になる可能性がある。そのためにも、教員を含め周囲の者は障害について理解した上で、支援することが必要である。そこで、教員が ASD, LD, ADHD といった発達障害の症状だけでなく、高次脳機能障害の症状を把握することで、より迅速な医療機関や支援団体への斡旋、対策に繋げることが出来るだろう。

5. 参考資料

- 池田理恵子・高橋智（2009）学齢期の高次脳機能障害の困難・ニーズと支援に関する研究—保護者調査から—, 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 60, 293-321.
- 栗原まな（2010）小児高次脳機能障害の実態調査, 小児科診療, 73(9), 186-191.
- 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部（2003）高次脳機能障害支援モデル事業 中間報告書について, 厚生労働省ホームページ, (<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/04/h0410-1.html>).
- 杉崎雅子（2002）中学校教員を対象とした発達障害についての調査—認知度, 経験度, 困っていること, スクールカウンセラーに望むこと—, 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 632.
- 原理代・小方朋子（2007）高等学校における特別支援教育に対する理解—高等学校教員に対するアンケート調査の分析を中心に—, 香川大学教育総合実践研究, 14, 31-40.
- 廣瀬綾奈（2022）小児期の高次脳機能障害への支援, 第2回支援コーディネーター全国会議・シンポジウム (<http://www.rehab.go.jp/application/files/6516/7807/8494/c51e39375d4c659dda50c80a359dedc4.pdf>).